
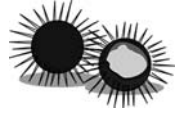


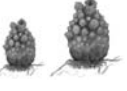


平成25年度奥尻町離島漁業再生支援交付金事業の公表について



町では、離島漁業の再生を図るため「離島漁業再生支援交付金事業」に取り組んでいます。この事業では、漁業生産力の向上や漁業集落の創意工夫を活かした取組みを推進することで、離島漁業の再生や海域環境の保全等といった多面的機能の維持増進を図るものです。また、関係要領等の規定により昨年度実施した取組みの内容を次のとおり公表します。

協定対象漁業世帯数	159世帯	交付金額	21,624千円
平成25年度実施した取組事項			
漁場の生産力の向上に関する取組	取組内容	取組の成果	取組成果の説明
	<p>●ウニ深浅移殖放流 ウニ深浅移殖放流は、潜水器漁業により深場に生息しているウニを漁場となる浅場へ移殖することで未利用となっていた資源の有効活用を図る取組みです。</p> <p>●アワビ種苗放流 アワビは島の特産品であるが、最近では、異常気象など様々な要因により資源の減少が深刻な状況となっています。このため、アワビ資源の回復のため種苗放流を計画し、過去の放流実績等を踏まえ、効果の高い放流方法を検討しながら種苗放流を実施した。</p>	<p>120万個</p> <p>5万個</p> 	<p>今年7月から実施のウニ漁における生産力の向上が期待されます。(昨年9月に実施)</p>  <p>高い種苗放流効果を期待し、漁協青年部の潜水士による海底での種苗放流を実施した。これによりアワビ資源の回復と次期アワビ漁での水揚げ量の増加が期待された。(アワビ漁の漁期は5～7月) また、放流効果を検討する際の資料とするため、前年度までの放流箇所において追跡調査を実施し成長の状況などを確認した。</p>
集落の創意工夫を活かした取組状況	取組内容	取組の成果	取組成果の説明
	<p>●ヤリイカ試験操業(棒受け網漁) ヤリイカ棒受け網漁は、20年程前まで安定した水揚げ実績があったものの、ヤリイカの来遊変動が大きく水揚げが不安定であるため、近年は操業を控える状態が続いている。 しかし、魚種としてのヤリイカは価格が高いことに加え、操業時期もスルメイカ漁と重複しないことから漁業生産力の向上が見込まれる魚種として、積極的に産卵礁を設置するなど資源増大に努めてきた。 こういった経緯から、漁期にどの程度の水揚げがあるかを把握(試験操業)し、良績があれば他の漁業者の操業意欲の向上(本操業)に繋がるものと期待し活動を計画した。</p>	<p>延べ調査回数 42回</p> 	<p>当該年度は計画日数(40日)に対し、順調に試験操業ができ水揚げもあったことから計画より2日間多い活動日数(42日)の操業でした。 そのうち23日間で水揚げがあり375箱の出荷を行えました。 今後について、ヤリイカは来遊変動が大きいことから試験操業を継続して行い、来遊状況(水揚げ)についての情報提供を実施する。 また、ヤリイカ漁は島の漁業の柱であるイカ釣り漁(漁期:6月～1月)の閑散期を利用した漁業であり、来遊状況が好調の際には他の漁業者の本操業へ繋がるものと期待している。</p>
	<p>●イワガキ養殖試験 奥尻町のイワガキは、今の所、漁業対象種とはなっておらず、棲息状況についてもほとんど把握されていない実情のため、奥尻町に棲息するイワガキの棲息場所や数量を調査すると同時に、産卵期などの基礎的な生態の把握に努め、他府県のイワガキと比較しつつ奥尻ブランドの可能性を検討する。 さらに、関係機関の協力を得て奥尻に適した養殖手法を模索する。</p>	<p>生息地調査実施 採苗 1回</p> 	<p>生息地調査の実施により資源量の把握ができた。 加えて、親貝を確保できたことと研究機関の協力により種苗生産体制(種苗生産技術の確立と技術移転)により、少量ではあるが採苗に成功した。 しかし、イワガキ養殖漁業の定着には時間を要するため、継続して取り組んでいく。</p>
<p>●ホヤ養殖試験 奥尻島のマボヤ漁は、天然資源に依存している為、採取方法は潜水器漁業が主体となっている。そのため、水揚げ量は少なく多大な労力を要している。 そこでホヤの安定供給を目的に本養殖試験事業に取り組む人工種苗生産を試みた。</p>	<p>試験養殖 採苗 1回</p> 	<p>昨年の試験を踏まえ、産卵時期を逃さないように親ホヤを採捕できたことから、採苗に成功しました。 今後は引き続き海中試験養殖での成長の経過を調査し、種苗生産の確立や養殖試験に取り組んでいく。</p>	